

# グラム・シュミットの直交化法について

担当：大矢 浩徳 (OYA Hironori)\*

以下では  $\mathbb{K} = \mathbb{R}$  or  $\mathbb{C}$  とする。グラム・シュミットの直交化法がうまく働くことの厳密な証明を与える。グラム・シュミットの直交化法を再掲しておこう。

## グラム・シュミットの直交化法 (Gram-Schmidt orthonormalization)

$B = \{v_1, \dots, v_n\}$  を  $\mathbb{K}^n$  の基底とする。このとき、以下の方法で  $B$  から  $\mathbb{K}^n$  の正規直交基底を得ることができる。

$$\begin{aligned} u'_1 &:= v_1, \\ u'_2 &:= v_2 - \frac{(u'_1, v_2)_{\mathbb{K}}}{(u'_1, u'_1)_{\mathbb{K}}} u'_1, \\ u'_3 &:= v_3 - \frac{(u'_1, v_3)_{\mathbb{K}}}{(u'_1, u'_1)_{\mathbb{K}}} u'_1 - \frac{(u'_2, v_3)_{\mathbb{K}}}{(u'_2, u'_2)_{\mathbb{K}}} u'_2, \\ &\vdots \\ u'_k &:= v_k - \sum_{i=1}^{k-1} \frac{(u'_i, v_k)_{\mathbb{K}}}{(u'_i, u'_i)_{\mathbb{K}}} u'_i, \\ &\vdots \\ u'_n &:= v_n - \frac{(u'_1, v_n)_{\mathbb{K}}}{(u'_1, u'_1)_{\mathbb{K}}} u'_1 - \dots - \frac{(u'_{n-1}, v_n)_{\mathbb{K}}}{(u'_{n-1}, u'_{n-1})_{\mathbb{K}}} u'_{n-1}, \end{aligned}$$

とし、

$$u_k := \frac{1}{\|u'_k\|} u'_k, \quad k = 1, \dots, n$$

とすると、 $\{u_1, u_2, \dots, u_n\}$  は  $\mathbb{K}^n$  の正規直交基底となる。

グラム・シュミットの直交化法で正規直交基底が得られることの証明。

$\{u'_1, u'_2, \dots, u'_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の基底であること、特に各  $u'_k$  は  $\mathbf{0}$  にはならないこと：

各  $k = 1, \dots, n$  に対し、 $\{u'_1, \dots, u'_k, v_{k+1}, \dots, v_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の基底であることを  $k$  に関する帰納法で示す。  
( $k = n$  の時が欲しい主張であることに注意。)  $k = 1$  のとき、定義より  $\{u'_1, v_2, \dots, v_n\} = \{v_1, v_2, \dots, v_n\}$  なので主張は正しい。次に、 $k \geq 1$  で  $\{u'_1, \dots, u'_k, v_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の基底であることを仮定して、 $\{u'_1, \dots, u'_k, u'_{k+1}, v_{k+2}, \dots, v_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の基底であることを示す。

\* e-mail: hoya@shibaura-it.ac.jp



補足：岩澤分解 (興味がある人向け)

上の『 $\{\mathbf{u}'_1, \mathbf{u}'_2, \dots, \mathbf{u}'_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の基底であること, 特に各  $\mathbf{u}'_k$  は  $\mathbf{0}$  にはならないこと』の証明中に行った議論から, 各  $k = 2, \dots, n$  に対して対角成分が全て 1 のある上三角行列  $N_k$  が存在して,

$$\begin{aligned} (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) &= (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_{n-2} \mathbf{u}'_{n-1} \mathbf{v}_n) N_n \\ &= (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_{n-2} \mathbf{v}_{n-1} \mathbf{v}_n) N_{n-1} N_n \\ &\dots \\ &= (\mathbf{u}'_1 \mathbf{v}_2 \cdots \mathbf{v}_{n-1} \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n = (\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) N_2 \cdots N_{n-1} N_n \end{aligned}$$

となることがわかる. ここで, 対角成分が全て 1 の上三角行列の積は再び対角成分が全て 1 の上三角行列となることから,  $N' := N_2 \cdots N_n$  とすると,  $N'$  は対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) N'$$

と書けることがわかる. さらに,  $N := (N')^{-1}$  とすると,  $N$  も対角成分が全て 1 の上三角行列で,

$$(\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) N$$

である. 次に,

$$A := \begin{pmatrix} \|\mathbf{u}'_1\| & & & \\ & \|\mathbf{u}'_2\| & & \\ & & \ddots & \\ & & & \|\mathbf{u}'_n\| \end{pmatrix}$$

とすると,

$$(\mathbf{u}'_1 \cdots \mathbf{u}'_n) = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) A$$

である. 以上より,

$$(\mathbf{v}_1 \cdots \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) AN$$

となる. ここで,  $\mathbb{K}^n$  の  $n$  個のベクトル  $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n$  に関して,

- $\{\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の基底  $\Leftrightarrow \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n$  を並べてできる  $n$  次正方行列  $(\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_n)$  が正則.
- $\{\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n\}$  が  $\mathbb{K}^n$  の正規直交基底

$$\Leftrightarrow \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_n \text{ を並べてできる } n \text{ 次正方行列 } (\mathbf{w}_1 \cdots \mathbf{w}_n) \text{ が } \begin{cases} \text{実直交行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{R} \text{ のとき}) \\ \text{ユニタリ行列 } (\mathbb{K} = \mathbb{C} \text{ のとき}). \end{cases}$$

という対応を思い出すと, 上の考察から以下の定理が言える:

定理 (岩澤分解)

任意の実正則行列  $X_{\mathbb{R}}$  に対し, ある実直交行列  $U_{\mathbb{R}}$ , 正の対角成分を持つ対角行列  $A$ , 対角成分が全て 1 の実上三角行列  $N_{\mathbb{R}}$  が存在して,

$$X_{\mathbb{R}} = U_{\mathbb{R}} A N_{\mathbb{R}}$$

となる.

また, 任意の複素正則行列  $X_{\mathbb{C}}$  に対し, あるユニタリ行列  $U$ , 正の対角成分を持つ対角行列  $A'$ , 対角成分が全て 1 の複素上三角行列  $N_{\mathbb{C}}$  が存在して,

$$X_{\mathbb{C}} = U A' N_{\mathbb{C}}$$

となる.